

デンマークの「森の幼稚園」における保育観

—「詩的ファンタジー」に着目して—

中村 紘子*

Thought of Childcare in “Forest Kindergarten” in Denmark:

Focusing on “Poetic Fantasy”

Hiroko NAKAMURA

Abstract

The purpose of this study is that to clarify the childcare view of the "forest kindergarten" in Denmark. It became clear through the participant observation and interviews in the field, in the Danish forest kindergarten, children are taken care that deepen the understanding about the forest and natural phenomena through the "poetic fantasy." In addition, it is suggested that this thought of childcare has been affected by the Grundtvig who is philosopher in Denmark. In forest kindergarten in Denmark, to decide in their own intention are valued. Forest kindergarten tell it to children while placing the value in the "poetic fantasy." It means children learn that their decision should always be with considering the surrounding environment and, to be careful to those creatures who live together even those that invisible.

Keywords: Denmark, forest kindergarten, N.F.S grundtvig, poetic fantasy, ”pædagogiske læreplaner”

1. 問題の所在

森の幼稚園は、1950年代初頭に、デンマークの1人の母親エラ・フラタウ（Ella Flatau）が自分の子どもと近隣子どもたちを森の中で預かる自主保育のかたちで始まった（ヘフナー, 2009）。それまでの「幼稚園」という建物があり、そこで保育をするという概念に新しい風が吹き、保護者の幼稚園の選択肢のひとつとして急速に全国的に広がっていった。現在では、森へ出かける前に集合する小屋などを所有する園や、バスを所有し各バス停で子どもたちを乗車させながら森へ向かう園など、その運営方法は多様だが、雨や雪の日であっても森の中で1日を過ごすという基本は変わらない。「子どもたちを自然の中で育てたい」と願う保護者や子どもにかかわる人々に共感を得て、国境を越えて他の北欧諸国やドイツ、スイスを中心に広がり、韓国や日本でも実践が生まれている。

キーワード：デンマーク、森の幼稚園、グルントヴィ、詩的ファンタジー、学びのプラン

* お茶の水女子大学大学院博士前期課程 2015年度修了

日本で「森のようちえん」という呼び名の活動が展開され、広く注目されるようになったのは、2008年「全国森のようちえんネットワーク」が設立した頃からである。日本の森のようちえんは、「自然体験を基軸にした子育て、保育、乳児・幼少期教育等の総称」と定義づけられており、これには学校教育法による幼稚園だけでなく、認可保育所や認可外保育所、学童保育、自主保育などが含まれる。それに伴い、漢字で「幼稚園」と表記すると、学校教育法による幼稚園と混同し誤解される可能性があるため、「全国森のようちえんネットワーク」では「森のようちえん」と平仮名で表記することになっている（今村, 2011）。

また、今村（2011）によると、森のようちえんの「森」とは、森や森林、林や川ばかりではなく、野原、里山、畑、川、海、公園など、広義にとらえた自然体験をするフィールドを指すものと捉えられている。

現在、日本では「全国森のようちえんネットワーク」の活動に加え、教育的な効果だけでなく、地域づくりの面でも各自治体が注目し始め、行政支援の事例が具体的になってきている。たとえば、長野県は2014年度に森のようちえんの支援を開始し、独自の認定制度づくりを柱とし、検討委員会を開いた（東京新聞, 2014）。2015年10月、長野県は「森のようちえん」を保育機関として認定する制度を整備した。森のようちえんを保育機関として認定した自治体は、長野県が全国初となったが、このほか、鳥取県や三重県の事例も報告されている。このように、行政の支援を受けながら、さらなる展開をみせる今日の森のようちえんであるが、森のようちえんの実践報告や運動の広がりについて、友定（2011）は、「既存の幼児教育施設との併存を目指しながらも、閉塞感のある幼児教育の現状への批判と、新しい方向を希求している姿にも思われる」と指摘する。また、内田（2013）は、「日本の森のようちえんは、生まれたばかりの赤ん坊のようなもの。内容的な質の向上、保育者の力量もまだ磨かなければならない。」と述べている。このような指摘をふまえると、「森の中で保育をする」という行為のみが、形式的に広がっていくことのないよう、その保育観を多様な視点から問い続けることは今後ますます必要になってくるといえよう。

2. 先行研究

今村（2011）によると、森の幼稚園の活動を日本で最も早く紹介したのは、写真家・石亀康郎である。写真集『森のようちえん』（石亀, 1995）と『さあ森のようちえんへ—小鳥も虫も枯れ枝もみんな友だち』（石亀, 1999）によって、鮮やかなカラー写真にて視覚的に、デンマークの実践を日本に伝えた。

その後、研究論文として扱われるようになったのは、2002年頃からである。百合草は「森の幼稚園」という名前をタイトルとして学術論文を執筆した、おそらく最初の日本人である（木戸, 2011）。「ドイツの『森の幼稚園』の実践と子どもの発達—森の中で育つ子ども」と題してIngrid Miklitzの“Der Waldkindergarten”という著作からドイツの森の幼稚園の名称、歴史、理念を紹介した。さらに、百合草（2002）は、幼児教育、保育の立場から、「意図的に構造化された幼稚園の空間」と「自然に構造化された森の幼稚園の環境」が、子どもたちと保育者に与える影響を心理学的な面から分析しており、森の幼稚園では、子どもたちは保育者の評価を気にすることなく、内発的動機に基づいて行動することが可能になると指摘した。翌年の2003年には、ドイツ在住の環境ジャーナリストである今泉が、ドイツの森の幼稚園での経験を『森の幼稚園—シュテルンバルドがくれたすてきなお話』の中で物語として描き、主として子ども向けに森の幼稚園の概要を紹介している。2010年には、財団法人キープ協会・キープ森のようちえんプロジェクトの中心的役割を果たす小西が実践者としての立場から、森のようちえんで過ごす子どもたちの姿を、写真集や講演会などを通じて、保護者や一般市民に伝えていく活動を始めた。

次に、森の幼稚園に関する先行研究を、いくつかの視点に分けて整理していくことにする。まず、子どもの発達に着目した代表的な研究に、ヘフナーの、森の幼稚園の卒園児と一般的な幼稚園の卒園児の育ちの差を検討した報告がある。そこでは、動機づけ・集中力・忍耐、社会的能力、授業中の協

働においては、森の幼稚園の卒園児のほうが優位であるという結論が示された。また、森の幼稚園における幼児の体力・運動能力に着目した研究もある。日切ら(2013)は、森の幼稚園の在園児や卒園児を対象に、運動能力検査を行い、標準化されたデータとの比較を行った。結果として、森の幼稚園の保育環境が幼児の体力・運動能力に対してポジティブな効果を持っており、在園児及び卒園児の体力・運動能力が一般的な幼稚園・保育園の卒園児と比較し、平均かそれ以上であることが示された。

森という環境に着目した研究として、木戸(2012)の、ホリスティック教育の観点から、ドイツの森の幼稚園について分析したものがある。木戸は、森の中で子どもたちは、耳や目からの情報のみに頼るのではなく、五感すべてがバランスよく刺激されるため、知識的に頭で理解するのではなく、頭と心と体がつながった形で、まるごと自然をとらえていると述べた。さらに、木戸(2013)は自然の素材を大切に、五感を通した直接体験が重視され、その中で豊かな感情や思考力を育んでいこうとするところで、森の幼稚園はシュタイナー教育の姿勢に通じるものがあると指摘した。

一方で、佐藤・磯部(2011)は、ドイツの森の幼稚園を訪問したうえで、保育者の役割の再考を促すものとして、森の幼稚園を位置づけた。佐藤ら(2011)は、子どもたちが森の中で日々出会う事柄は、基礎から応用へと転換するわけでもなく、権力によって選択された教育内容でもないとし、それらは系統性や発達段階を無視して子どもの前に立ち現われると述べる。このとき、保育者は、子どもに知を伝達する存在としてではなく、子どもの学びを支える援助者であるとも主張する。また、友定(2011)は、子どもにとって森とは、何かの意図に基づいて自然やものと関わる場所ではなく、対象そのものと出会うことを目的としたかかわりが主である場所だと主張している。そして、子どもだけでなく都市化された大人たちにとっても、森のような緩衝的な自然環境はかかわりやすく協働をもたらすという点に注目している。そのうえで、「森では、子どもと大人の保育的関係が転換する」と言及し、子どもの命を守り、危険を未然に防ぐなどの保育者の基本的役割は、完遂されなければならないが、子どもが体験することに対するかかわりの質は大きく変化すると述べている。子どもが森の中で自然に直面していく姿は、大人にとっても心が動く体験となり、そこでは、「近視眼的な保育者のかかわり」を排して、一人の人間としてそばに立つことを選び取るような関係になると指摘する。

3. 本研究の目的

先行研究をみてきたように、日本へ森のようちえんが導入されるにあたり、ヨーロッパの取り組みに関する研究はこれまでも報告されている。しかし、ドイツに関するものに比べると、森の幼稚園発祥の地であるはずのデンマークに関する報告は筆者が把握する限り少ない。その中でも、松石・西(2012)によって、「森で保育者はどのような役割を果たしているのか」ということは報告されているが、そこでは、「見守る」「促す」「注意する」「なだめる」「話を聞く」などの保育者の行動を観察し、それらを分類することに留まり、具体的に保育者が用いていた言葉や、森の幼稚園の保育観ということまでは十分に報告されていない。そこで本研究では、デンマークの「森の幼稚園」における保育観について、デンマーク特有の文化や思想にも着目しながら、現地のある森の幼稚園における筆者自らの参与観察をもとに、明らかにしていくことを目的とする。森の幼稚園の発祥の地であるデンマークの実践について思想的な部分も含めて考察していくことで、日本の「森のようちえん」についても新たな保育観を提示できるのではないだろうか。

4. 方法

本研究では、デンマークの森の幼稚園における保育観について、実際の保育に密着して現地の文化をふまえて明らかにするために、デンマーク・イーデル自治体にある私立スティンルース森の幼稚園にて、2014

年・2015年9月の2度にわたり、計3週間の参与観察を行い、フィールドノートを作成した。また、参与観察から得られたデータの補足として、保育後に活動拠点の森や保育者自宅にて保育者へのインタビューを行った。この参与観察で得られた子どもたちや保育者の発言や、保育者のインタビューの日本語訳は、日本に留学中のデンマーク人M氏に協力を得た。なお、本調査はお茶の水女子大学の倫理審査委員会より承認を得ている。

5. スティンルース森の幼稚園の概要と学びのプラン

まず、調査対象となるスティンルース森の幼稚園の概要（表1）と、おおまかな一日の流れ（表2）を示す。

【表1 スティンルース森の幼稚園の概要】

活動の拠点
首都コペンハーゲンから北西へ車で約30分のスティンルース（Stenløse）町の北部に位置するガンルース（Ganløse）の森。森の広さは約167ヘクタール（東京ドーム34個分）。樹木の多くは、樹齢100年以上の落葉樹。森の南東部には、昔スウェーデン岩盤から流れてきたといわれている岩がある。湖も隣接している。
子ども
2歳11か月～就学前（5、6歳）24人 男：女=3:1（2014年）
保育者
専任保育士（有資格者）2人、アシスタント（有資格者）2人 補助（無資格者）1人 原則、専任保育士を含む3人が一緒に森へ出かけ、保育を行う。

【表2 森の幼稚園の一日】

時間	活動
7:00～	朝の時間外保育
9:00～	バスに乗車、移動
9:20～ 9:40～	森に到着 おやつ
12:00～	森での保育 昼食
12:40～ 14:20～	森での保育 帰りの会
14:30～	バスに乗車、移動
14:50～	延長保育
16:30	

次に、保育の基盤となる考え方を理解するために、スティンルース森の幼稚園の保育のガイドライン「学びのプラン」（pædagogiske læreplaner）に着目する。学びのプランとは、2003年より「ソーシャルサービス法」第8条によって、デンマークのすべての保育施設にたいして作成が義務付けられる保育のガイドラインのことである。学びのプランは、①子どもの全面的な人間形成・個の確立（Barnets alsidige personlige udvikling）、②人間関係・社会的能力（Sociale kompetencer）、③言葉（Sprog）、④身体と動き（Krop og bevægelse）、⑤自然と自然現象（Naturen og naturfænomener）、⑥文化的表現方法と価値（Kulturelle udtryksformer og værdier）、の6つの領域を土台に作成され、保育者は自分たちが保育を行う環境等を考慮したうえで、「6つの領域を具体的にどのように実行し、どのように目標を達成するか」をまとめ、自治体に提出する。

本調査では、スティンルース森の幼稚園の学びのプランの中でも、特に「言葉」の領域に着目することとし、以下にその内容を示す。

スティンルース森の幼稚園では、子どもたちが自分の感情について、また、起きた問題をどのように処理するのかということについて、語る機会を大事にしている。そのために、保育者は、子どもの気持ちや、抱いている疑問についてよく耳を傾けるようにする。話を聴いてくれる人がいる安心感から、子どもたちは自分の感情や意思を表現することができ、その空間において開放的になると私たちは考えている。

言葉は、世界への入り口である。子どもたちの生活の中にある言葉、彼らが感じている世界に近

づいて言葉や概念を置くことが重要で、そこから様々な発見をしたり関心をもったり世界を広げることを私たちは重要だと考える。

ここで、下線部「言葉は、世界への入り口である。子どもたちの生活の中にある言葉、彼らが感じている世界に近づいて言葉や概念を置くことが重要で、そこから様々な発見をしたり関心をもったり世界を広げることを私たちは重要だと考える。」という記述に注目する。これは、どのようなことを述べているのだろうか。

スティンルースの森の幼稚園の子どもたちは、森の中で何らかの目印になるような岩や木など、それから森の中で起きる現象について、自分たちにとっての意味を見いだしながら、それらに特有の名前を付けることがあった。例えば、「トロールのおしっこ」呼ばれるものがある。「トロールのおしっこ」とは、森の奥へ入っていくと現れる大きな岩の表面のくぼみに溜まる雨水のことである。この岩の前を通るとき、子どもたちは、くぼみに溜まっている水の量を確かめる。岩は周囲の地面よりも1.5mほど低い位置にあるため、少し岩から離れてみれば小さな子どもでも、溜まっている雨水を確認することができる。子どもたちは、この岩の前を通るたびに、岩の上に溜まる「おしっこ」



【図1「トロールのおしっこ」を確かめる子どもたち】

の量を確かめて、トロールが森の中で生活していることを話題にする。図1は、岩によじ登ったり、少し離れたところから「トロールのおしっこ」の量を確かめる子どもたちの様子である。

このように子どもたちは、森の中で何らかの目印になる岩や木など、それから森の中で起きる現象について、自分たちにとっての意味を込めながら名付けたり、それにまつわる話を語ったりした。「子どもたちの生活の中にある言葉、彼らが感じている世界に近づいて言葉や概念を置く」とは、保育者が一般的な言葉で物事を説明し、それにたいし子どもが理解を示していくのではなく、子どもたちが森の中で関心を抱くことにたいして、目には見えなくとも森に棲む生きものを意識しながら、子どもたちの表現で描いていくことのようにである。

6. グルントヴィと「詩的ファンタジー」

こうした「ファンタジー」を重視するような表現方法について、アイザイア・バーリン(1909-1997)は、これをデンマークに根付いている文化的なものとし、この伝統を「表現主義」と名付けた。一般に「表現主義」というと、20世紀初頭のドイツを中心とした前衛的な芸術運動をさすが、バーリンは、ここで述べる「表現主義」を、バルト海文化圏に端を発する伝統に由来するものとし、この伝統の最初にくる人物はヘルダー(1744-1803)であると主張した(清水, 2007)。

ヘルダーは、フランス的な啓蒙主義、合理主義、あるいは機械論的な自然観に反対し、人間の情念や感情を重んじて、「人間は奥底に深い感情をもって他人と共感しつつ、それを吐露する表現的なものだ」とする人間観を提示した人物だとバーリンは位置づけている。ヘルダーは、特に民話や神話の重要性を発見した人物として有名であり、彼による「表現主義」は、人間や社会や自然を対象的なものと見なし、分析や計算を旨とする科学的な知識や考え方に立たない。そうではなく、人間や社会や自然に「意味」や、「詩的なもの」、「ファンタジー」を見だし、芸術的な形成をしていくことが「表現主義」だという(清水, 1997)。また、清水(1997)によると、こうした「表現主義」は、今もデンマークには根強く残っていると、科学の支配する今日では実証的な傾向が強まったとはいえ、それでも学校では必ず神話や民話、伝

承物語の朗読の時間がある。そして、このような文化をデンマークに根付かせたのは、ヘルダーに影響を受けたグルントヴィ（Grundtvig, N.F.S, 1783-1872）という人物であると指摘する。

グルントヴィは近代デンマーク精神の父と称され、国民詩人、牧師、思想家、哲学者、教育者、政治家であり、その哲学は19世紀後半、デンマークの新しい民族主義を形成するに際して大きな刺激を与えてきた。教育の方面での貢献としては、「フォルケホイスコーレ」を構想し、世界で最初に社会教育を唱えたということがあげられる（Korsgaard, 2012）。グルントヴィは、「教育とは、知識や資格のために学んだり試験で人間を奇形にするものではなく、生のため、自由と自立のために学ぶもの」と主張し、試験を認めず、無意味な暗記や単位認定といったことを否定した（Korsgaard, 2012）。立身出世の競争を施す支配者養成のための学校を「死の学校」と批判し、「規範の上に立つ自由」求めて、対話による教育を「生の学校」として提唱した。合理的な自然科学の知識を与え、冷静な分析的悟性能力を育てるのではなく、物語的に形成された意味・解釈の世界と詩的ファンタジーの世界を大事にし、子どもたちのもつ想像力に訴えかけ、それを創造力にまで高めていこうとする教育を重視したのである（清水, 2007）。

そして、グルントヴィは『北歐神話記』（1832）の中で「子ども時代、とくに幼年期は『空想・詩情の時期』であるとし、イメージや神話、物語を通じて生を直感的にすべきである。」と述べている（Korsgaard, 2012）。このことから、グルントヴィがいかに、子どもにとって「詩的ファンタジー」が重要であると考えていたかがよみとれる。

グルントヴィの思想を具体化したのはデンマークの最高教育者といわれる教師クリステン・コル（1816-1870）である。特に、彼は後の幼児や児童教育にも非常に強い影響を与えた。幼児期の子どもについて、次のようにも言及している（kold, 1987）。

子どもの心は、ファンタジーを通し、証明できないようなことを子どもらしい心で喜んで受け入れることができる。私自身が子どもだった時代を振り返ってみると、ボランティアの牧師たちが、あるときは神話、あるときは昔話、あるときは巨人やドワーフの話をしてくれた。こうした物語を通して教えてきたこと、そういう人たちがたくさんいたことを私は知っている。それはかけがえのないものだとは私は考える。しかし、こうした物語が冷ややかに笑われるようになり、知識ばかりを与えられるような教育になることを避けなければならない。いろいろな現象、出来事が知識として、分析されて、細かく切られて、子どもたちに与えられることにどれほど価値があるだろうか。

彼の教育の基本原理は「子どもの心を傷つけない教育」であり、そのために「物語による教育」という彼独自の手法が編み出された。コル（2007）は、「初等学校の教育が、理性に向かって語りかけて感情にはただ部分的にしか語りかけず、その一方でファンタジーをほとんど無視してきたことは犯罪的である」と述べ、理性や合理主義だけでものごとが語られていくことに危機感をあらわにした。

ここまで、グルントヴィやコルの思想から「詩的ファンタジー」が、デンマークの幼児期の教育において、どのように取り上げられてきたかをまとめた。次に、この「詩的ファンタジー」に着目したうえで、スティンルース森の幼稚園の保育観についてさらに考察を深めていくことにする。

7. 森の幼稚園と「詩的ファンタジー」

事例1 「妖精が泣いている！」

次に紹介する事例は、雨が降った夜の翌日、森の奥のほうへと入っていった日に見られた、V子（3歳）、C子（3歳）、H子（4歳）に関する事例である。

森の奥へと入っていく途中、皆より少し遅れて歩いてきたV子。立ち止まり、まぶしそうに上を見上げ、前の晩に降った雨の滴が葉の表面で光っているのを見つめている。それから、「見て!」と、前を歩いていたC子とH子と呼ぶ。2人は、「なあに?」と、駆け戻ってくる。V子は「見て、宝石!」と、葉の表面の滴を指さしながら、見つけたものを伝える。C子とH子は、背伸びをして触れようとしたところ届かない



【図2 葉の表面の滴に触れようとする子どもたち】

(図2)。H子が背伸びをするのをやめ、その場で跳ねると指先が葉に触れて、滴が3人の顔の上に落ちてくる。3人は驚き、声をあげながら先を行く他の子どもたちや保育者のところまで走っていく。保育者の一人が、何が起きたのか尋ねると、H子が、興奮しながら「妖精が泣いているの!」と伝える。保育者は「まあ!ほんとに?」とH子の肩に両手を置いて、驚いた表情で話を聞く。その横で、V子とC子が「そうだよ!ほんとだよ!たくさん泣いたの!」と口々に言い、両腕を回して「たくさん」を表現しながら、顔に雨滴が落ちてきた様子を保育者に報告する。

最初に滴を見つけたV子は、それを「宝石」と呼んでいたが、H子は「妖精が泣いている」と保育者に報告した。V子とC子の2人もその表現が気に入ったのか、「妖精がたくさん泣いていた」というように、自分たちが体験したことを保育者に伝えた。H子の中で「宝石」から「妖精の涙」になった経緯については分からなかったが、滴の美しさや、それらが降ってきて顔に浴びた驚きなど、子どもたちは目の前で起きた現象やそのときの感情について、自分たちの言葉を用いながら、保育者に報告した。そして、保育者も子どもたちと同じように驚いたり、楽しんだりしながら、子どもたちの言葉の表現を受けとめていた。

このように、森の幼稚園の子どもたちは、自然が見せる様々な現象を自らの言葉を用いて表現し、そのイメージによって広がる世界を友だちや保育者と共有して楽しむ。子どもたちの発見に耳を傾けるとき、保育者は、子どもたちによる「詩的ファンタジー」を受けとめる姿勢を忘れないのである。

事例2 「トロールのために食事をつくる」

次の事例は、S男(5歳)、M男(5歳)、J男(4歳)の3人が、朝のおやつを森の入り口の東屋で食べ終わり、全員が食べ終わるまでその近くで遊びながら待っている時間に見られた事例である。

森に暮らすトロールのために、何か食べ物をつくろうとはりきるS男とM男とJ男。岩の上に、泥と木屑を固めて、フリカデラ(ミニハンバーグ、デンマークの代表的な家庭料理の1つ)をつくりはじめる。S男は、フリカデラの大きさや形を上や横から何度も見て、ちょうど良いと思う大きさになったことを確認する。それから、「ほかにサラダもつくろう。トロールが喜ぶかもしれない!」とM男とJ男の2人に提案し、さらに草や葉を周囲から集めて、添えることにする。フリカデラとサラダができてから、S男が、近くに横たわっていた太い木の枝を持ってきて、岩に



【図3 トロールのフリカデラをつくるS男、M男、J男】

立て掛けるように置く(図3)。J男が「それはなに?」と尋ねると、「ナイフだよ、フリカデラ用の。」とS男。J男は、「トロールは手で食べると僕は思う。ナイフはいらないよ。」と答える。そして、J男はM男に同意を求めるが、M男は「でも、もしかしたら彼(トロール)は、ナイフを使いたいかもしれないよ。」と答える。J男は、「そう、まあ、もしかしたらね、もしかしたら…」と言い、3人は太い木の枝をそのまま岩に立て掛けておくことにした。次に、フォークになる木の棒を探し始めた。

この事例は、子どもたちが、自然の素材でフリカデラやサラダなど、自分たちが日常食べている食事を森の中に暮らすトロールのためにも用意しようとする場面である。その際、トロールにとってのフリカデラの大きさはどれくらいが良いのかを何度も確認したり、トロールは手で食べるのか、それともナイフやフォークを使うことがあるのか話し合ったりするなど、トロールの生態について、想像を膨らませていく。この過程には、森を共有する大事な仲間として、トロールにたいする愛情や思いやりが込められていると受けとれる。この事例は、自分たちがトロールのために食事をつくるということで、さらに、ファンタジーの世界にかかわっていかこうとする場面である。食事をつくるという行為から、子どもたちは「自分たちとトロールの物語」を紡いでいくことになる。

事例3 「妖精になってとびまわる」

次に紹介するのは、よく晴れた日に、森の中の比較的ひらけた場所にある岩の上でA男(4歳)とP子(3歳)の2人が遊び様子である。

上半分だけが地面に現れ、下半分は地中に埋まっている岩が、10個ほど並んでいる場所がある。そこで、A男とP子の2人は遊んでいる。地面に落ちないように岩から岩へ、腕を羽のように広げて跳んでいる。A男が、「気をつけて!落ちたら人間に気づかれちゃうかもしれないよ。」とP子に声をかけると、P子は「わかってる!」と言いながら隣の岩へ跳ぶ。



【図4 妖精になって岩の上をとぶA男とP子】

この後の2人の様子から、2人は「森に棲む妖精」になって、岩を「人間の頭」と見立てながら、その上を跳びまわっているようだった。妖精の視点から、人間たちを見ているようだった。「落ちたら人間に気づかれちゃうかもしれないよ。」という言葉から、妖精たちは人間に気づかれずに森の中で暮らしているというイメージを子どもたちがもっていることが分かる。自分たちの知らないところ、あるいは見えないところで、妖精には妖精の暮らしが森の中で繰り広げられていると子どもたちは考えているようだ。このように、子どもたちは、森という環境を、樹木や草花、生き物が生きているほか、妖精やトロールなども棲んでいる場所、そして彼らと共有する場所としてとらえている。そして、ときには、そうしたファンタジーの世界に入り込み、森に棲むものの立場になって人間をとらえたりもする。

このように子どもたちが妖精やトロールにまつわる話や遊びを日常的に楽しんでいることについて、保育者はどのように考えているのだろうか。次に、子どもたちの様子や、保育の中での言葉、なぜトロールや妖精を話題にするのかについて、園長にインタビューをした内容をまとめ、考察を加えることとする。なお、インタビュー内容については、音声レコーダーに録音した会話を、M氏と筆者により日本語に訳した文を示す。

【インタビュー1】（下線は筆者によるもの）

筆者：保育者の皆さんも、子どもたちも、よくトロールや妖精について話をするように思いますが、それはなぜですか。

園長：デンマーク人は、もともとそういう話が好きというのがありますが、保育の中で、トロールや妖精について話すのは、森で起こる様々な現象を理解していくときに、目に見えないものを思い描く力、（想像力や思考力）を大切にしているからです。森は私たちと同じように生きているから、再び訪れたときには前回とは異なる姿を見せます。さっき見た「トロールのおしっこ』もそのひとつです。(1)こうした森の変化を発見したときに、子どもたちがおしゃべりをして物語をつくりながら森で起きている状況を理解しようとする時間を大切にしたいのです。子どもたちにとってだけでなく、私たち大人もそういうファンタジーの話が大好きです。毎日、森に出かけている私たちはそういうトロールや妖精たちと一緒に過ごせることに喜びを感じていますよ。

まず下線部(1)「こうした森の変化を発見したときに、子どもたちがおしゃべりをして物語をつくりながら森で起きている状況を理解しようとする時間を大切にしたいのです。」より、森で起きる様々な変化を「トロール」や「妖精」の存在と重ね合わせてとらえること自体を大切にしているのではなく、ここから子どもたちが物語をつくり、語ることを大切にしていることが分かる。そこで、「物語をつくりながら森で起きている状況を理解する」とは、どのようなことなのか改めて尋ねた。

【インタビュー2】（下線は筆者によるもの）

筆者：「物語をつくりながら、状況を理解する」とは、どういうことですか。

園長：森の中で、目の前で起きる現象にいろいろなストーリーを自分で加えていくということです。たとえば、「トロール」のおしっこを見て、トロールは今頃森の中で何をしているか考えることは、自分以外の生きものの視点で森を考えることになります。たとえば、「森ってどういう場所？」と、子どもたちに聞くといろいろな答えが返ってきます。「木がたくさんある場所」というような(2)辞書的な定義だけでは終わってほしくないのです。「どんなものに出会えて、何が嬉しい場所なのか、それは誰にとってなのか」を聞かせてほしいと私たちは願っています。

スティンルースの森の幼稚園の子どもたちは、森の中で何らかの目印になるような岩や木など、それから森の中で起きる現象について、自分たちにとっての意味を見いだしながら、それらに特有の名前を付けることがあった。下線部(2)の辞書的な定義で語ることで終わってほしくないという保育者の願いは、こうした子どもたちによる名付けが大切にされていることにも表れている。

一方で、妖精やトロールのことを話題にするのは、いつも子どもたちからというわけではない。次に紹介する事例は、お弁当の時間にみられた、一人の保育者が妖精について話題にする場面である。

事例4「森の妖精を驚かせないように」

お弁当の時間になり、X男（4歳）は勢いよくお弁当の箱を開けると「今日はハムが入っていた！」と大きな声で皆に報告した。これに、R子（5歳）も立ち上がり「私は、りんごが入っていた！」と大きな声でX男に伝える。まわりにいた数人の子どもたちも、口々にお弁当箱の中身をほかの子どもたちや保育者に伝え始める。だんだんと騒がしくなる状況に、保育者は、指を口にあてるジェスチャーをしながら、「気をつけて。森の妖精を驚かせないように。」と子どもたちに伝える。立ち上がっていたR子は手で自分の口をおさえながら、辺りを見渡しながら元の場所に座る。

この事例では、お弁当の始まりに興奮して声が大きくなってしまいうどもたちに、保育者は、森に棲む妖精の立場になって考えさせるような言葉をかけた。このほか、おやつや帰りの会するときなど、騒がしくなる子どもたちがいた状況においても、保育者は、森に棲む妖精やトロールがどう感じているか考えさせる伝え方をすることがあった。このような状況では、「静かにしなさい」と子どもたちに伝えることもできる。そのほうが、子どもたちにとって従いやすい指示になることも考えられる。しかし、「気をつけて。森の妖精を驚かせないように。」という言葉を用いたことに、保育者のどのような思いがあったのだろうか。そのことについて、保育者に尋ねてみた。

【インタビュー3】（下線部は筆者によるもの）

筆者： さっき、「森の妖精を驚かせないように」と言ったら、子どもたちが静かになったので、驚きました。

保育者： 子どもたちはあのとき本当に静かになりましたね。でも、(3)子どもに、「分かりやすいように」や、「言い聞かせるために」、妖精の話をしたとは思っていません。私たちが大事にすることは、大人に言われたから、そうするというような習慣をなくすことです。子どもたちが自分で考えられるように、「妖精」のことを考えてほしいという気持ちでファンタジーの力を借ります。

下線部(3)の子どもに、「分かりやすいように」や、「言い聞かせるために」、妖精の話をしたとは思っていない、という発言は、保育者の「詩的ファンタジー」にたいする考え方を理解するのに注目すべき点だろう。子どもたちに「分かりやすいように」あるいは「言い聞かせるために」、ファンタジーを安易に用いていたわけではなく、「森の妖精を驚かせないように」という表現から、子どもたちに自分の頭と心をはたらかせて、今の自分のふるまいを考えてほしいと考えていたのである。このことから、森の幼稚園では、「詩的ファンタジー」を通して、他者（人、もの、環境）にたいする思いやりをもちながら自分で考えて行動することが大切にされているということが明らかになった。

まとめと今後の課題

本研究では、デンマークの森の幼稚園における保育観について、デンマーク特有の文化や思想に着目しながら明らかにしていくことを目的とした。デンマークの森の幼稚園では、森の中で大切なものや特別なもの、森の中で起きる現象について、自分たちにとっての意味を見いだしながら、特有の名前を付けて語られていた。そうして詩的に語ることで、森への理解を深めていくことに価値をおく保育観があることが明らかになった。また、これには、グルントヴィヤコルによる、「詩的ファンタジー」を介して世界をとらえていくという思想が背景にあることが示唆された。

しかし、保育者は子どもたちに「詩的ファンタジー」を介して世界をとらえることを押し付け、「トロール」や「妖精」の話をするよう促しているわけでは決してない。また保育者は、保育者が考えることを「子どもに分かりやすいように伝えるため」あるいは「子どもたちに言い聞かせるため」の道具として、「詩的ファンタジー」を位置づけているわけではないというのが注目すべき点であった。詩的ファンタジーの世界を大切にする理由として、目に見えないものを含み、自分の頭と心をはたらかせて考えてほしいという願いをもっていた。子どもたちの自己決定が尊重し、重視されるデンマークの保育・教育において、その自己決定は、自分を取りまく環境や、その環境に共に生きるものへの配慮のうえで成り立つということを、森の幼稚園では「詩的ファンタジー」を通して子どもたちに伝えていたということが考察された。

今後は、森の幼稚園以外のデンマークの保育における「詩的ファンタジー」にも焦点を当て、森の幼稚園と比較することを課題とする。

<引用文献>

- ヘフナー,P. (佐藤 竺訳) (2009) 『ドイツの自然・森の幼稚園—就学前教育における正規の幼稚園の代替物—』 公人社.
- 今村光章 (2011) 『森のようちえん—自然のなかで子育てを—』 解放出版社.
- 木戸啓絵 (2012) 「森の幼稚園の事例研究：ホリスティック教育の観点から」 教育研究 56, 23-33.
- コル, C.M. (清水満訳) (2007) 『コルの「子どもの学校論」—デンマークのオルタナティブ教育の創始者—』 新評論.
- Kold, C. M. (Svendsen, L. S., Trans.) (1986) Christen Kold fortæller, 48.
- Kold, C. M. (Svendsen, L. S., Trans.) (1987) Om børneskolen Dansk Friskoleforening, 48.
- Korsgaard, L. (2012) “N.F.S Grundtvig” Scandinavian Book.
- 松石友里香・西栄子 (2012) 「デンマーク・森の幼稚園における保育環境に関する考察～森の中での保育者の役割～」 日本建築学会研究報告. 九州支部. 3, 計画系 (51), 381-384.
- 佐藤史浩・磯部裕子 (2011) 「森の幼稚園—教育的な試み—」 宮城学院女子大学発達科学研究 (11), 43-51.
- 清水満 (1997) 『共感する心、表現する身体—美的経験を大切に—』 新評論.
- Stenløse Private Skovbørnehave (2013) Virksomhedsplan.
(www.skovboernehave.dk/Documents/Virksomhedsplan2013.pdf) 2014/05/01 アクセス
- Stenløse Private Skovbørnehave (2014) Virksomhedsplan.
(www.skovboernehave.dk/Documents/Virksomhedsplan2014.pdf) 2015/01/15 アクセス
- 友定啓子 (2011) 「『森の幼稚園』の保育的意義—人とかかわる力を育む視点から—」 山口大学紀要第3部 芸術・体育・教育・心理 61号.
- 東京新聞 (2014/5/12) 「『森のようちえん』認定の動き」
- 内田幸一 (2013) 「日本型？森のようちえん」 今村光章『ようこそ！森のようちえん—自然のなかの子育てを語る—』 解放出版社, 107-116.
- 百合草禎二 (2002) 「ドイツ『森の幼稚園』の実践と子どもの発達—森の中で育つ子ども—」 常葉学園短期大学紀要 第33, 135-165.